

平成 28 年度

病害虫発生予察情報

第 10 号

8 月予報

道総研中央農業試験場予察診断グループ

平成 28 年 7 月 26 日

季節予報（付記）によれば、8 月の天気は数日の周期で変わりますが、南からの湿った気流の影響を受けやすいため、降水量が多い確率と平年並の確率がそれぞれ 40%、気温はほぼ平年並と予報されています。

これまでの発生状況と季節予報から、多めの発生が予想される病害虫は、豆類の菌核病、灰色かび病、茎疫病、ばれいしょの疫病、てんさいの褐斑病、あぶらな科野菜の軟腐病、モンシロチョウ、りんごの黒星病です。

8 月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想		注意事項および防除対策
		発生期	発生量	
水稻	いもち病	[葉いもち] 遅 [穂いもち] 並	[葉いもち] 並 [穂いもち] 並	穂いもちに対する出穂期散布は必ず実施する。耐性菌発生リスクを高めないために、薬剤の選択に注意する。 葉いもちの発生が多く出穂期間が長引く場合には穂が完全に揃うまで散布を継続する。
水稻	アカヒゲホソミドリカスミカメ	早 (既発)	並	本種に対する重要な防除時期である。防除の適期実施に留意する。
ばれいしょ	疫病	早 (既発)	多	初発後は急激にまん延するので、散布遅れにならないよう注意する。予察情報や気象情報を活用し、適切な防除を実施する。
てんさい	褐斑病	並 (既発)	やや多	本病に対する防除薬剤として Q o I 剤は使用しない。また D M I 剤に対する低感受性菌が認められているため、薬剤の選択には特に注意する。散布間隔が開きすぎないように注意する。
たまねぎ	ネギハモグリバエ	—*)	—*)	発生地帯においては、成虫食痕の確認を励行し早期防除に努める。
あぶらな科野菜	コナガ	—	やや少	ジアミド系薬剤に対する抵抗性遺伝子の保持個体が確認されているため、薬剤の選択に注意する。
りんご	黒星病	早 (既発)	多	散布間隔が開きすぎないように注意する。

*：平年値がなく、発生予想の対象外

A. 水稻

いもち病（葉いもち） 発生期：遅 発生量：並
（穂いもち） 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) いもち病は弱い雨が長期間続いた場合や、寡照によって水稻の抵抗力が低下すると多発しやすい。発病適温は 20～25℃であり、最低気温 16℃以上で発病の危険がある。
- (2) 各予察田の「きらら 397」における葉いもちの初発期は、比布町では 7 月 17 日（平年：7 月 14 日）と平年よりやや遅く、岩見沢市（平年：7 月 23 日）および北斗市（平年：7 月 15 日）では未発生

- である。葉いもちの発生量は、比布町では平年より少なく推移している。
- (3) 7月3半旬の巡回調査では、一般田において葉いもちの発生は確認されていない。
 - (4) 葉いもち初発予測システム「BLASTAM」によると、7月上旬および中旬に広い範囲で感染好適条件となった日が出現している。
 - (5) 水稻の生育は平年並であり、出穂期も平年並になると予想される。
 - (6) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
 - (7) 以上のことから、葉いもちの発生期は平年より遅く、発生量は平年並で、穂いもちの発生期および発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 穂いもち防除は出穂期の1回散布を基本とするが、葉いもちの発生が多く出穂期間が長引く場合には、散布間隔を1週間程度として穂が完全に揃うまで散布を継続する。
- (2) 多湿条件が続くと急激にまん延することがあるので注意する。
- (3) MBI-D剤およびQOI剤を茎葉散布する場合には、耐性菌発生リスクを低減するため防除ガイドに準拠して使用する。

ウンカ類	発生期：既発（ヒメトビウンカ第2回：やや遅）	発生量：並
-------------	-------------------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカは高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。セジロウンカは道内で越冬できず、大陸や本州以南から飛来して、8月中旬以降の飛来成虫は水田への定着率が低いとされている。
- (2) 予察灯によるヒメトビウンカ第2回成虫の初誘殺日は、長沼町で7月19日（平年：7月13日）、比布町で7月20日（平年：7月13日）と平年より遅かった。予察灯によるセジロウンカ成虫の誘殺は北斗市で7月3日（平年：7月29日）と平年より早かった。長沼町および比布町では誘殺が認められていない。
- (3) ヒメトビウンカの予察田のすくい取り調査による第2回成虫捕獲数は、いずれの地点も平年並であった。予察灯による誘殺数は、いずれも地点も平年より少なく推移している。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 多発による被害が予想される水田では、防除ガイドに準拠し、カメムシとの同時防除を実施する。
- (2) 吸汁害が発生するのは、7月下旬以降の第2回成虫発生時に株当たり寄生頭数が50頭（20回振りすくい取り換算頭数で成虫1,800頭または幼虫900頭）以上の激発となった場合である。

アカヒゲホソミドリカスミカメ（第2回）	発生期：既発（早）	発生量：並
----------------------------	------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による第2回成虫の初誘殺期は比布町で6月30日（平年：7月13日）、北斗市で6月6半旬（平年：7月3半旬）と平年より早く、長沼町で7月7日（平年：7月9日）と平年並であった。
- (3) 誘殺数は北斗市では平年よりも多く、長沼町および比布町では平年より少なかった。
- (4) 7月3半旬の巡回調査によると、畦畔すくい取り調査で多発生の目安となる第2回成虫の捕獲頭数23頭を超えた地点は認められなかった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、第2回成虫の発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 基幹防除
 - ① 茎葉散布は出穂期とその7日後の2回を基幹防除として実施する。
 - ② ジノテフラン液剤またはエチプロール水和剤Fを使用する場合、基幹防除を出穂期7～10日後の1回散布に省略できる。
 - ③ 水面施用を実施する場合は、出穂期から7日後までに処理する。
- (2) 追加防除は、薬剤の使用時期や回数など使用基準を遵守し、以下のとおり実施する。
 - ① 散布予定日の2～3日前に水田内すくい取り調査（20回振り）を行い、割粃の少ない「きたくりん」および「吟風」では3頭、「きらら397」で2頭、割粃率の高い「ほしのゆめ」では1頭に達した場合に追加防除を実施する。その後も、同様の調査を行い、上記水準を下回るまで順次7～10日間隔で追加防除を継続する。
 - ② 水面施用を実施した場合には、出穂3週目にすくい取り調査を行い、上記に準じて追加防除を実施する。
- (3) 加害期間は水稻の黄熟期までであり、その後の防除は不要である。

フタオビコヤガ（第3回） 発生期：遅 発生量：少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨が続きと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による第2回成虫の初発日は、比布町で7月1日（平年：6月26日）と平年よりやや遅かった。長沼町（平年：7月6日）および北斗市（平年：7月3日）では誘殺は認められていない。
- (3) 予察灯による第2回成虫の誘殺数は、誘殺が認められた比布町で平年より少なかった。
- (4) 予察田における第2回幼虫の被害葉率は、北斗市では平年並で、長沼町および比布町では平年より低かった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、第3回幼虫の発生期は平年より遅く、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 8月下旬に10株について幼虫被害を調査し、被害葉率が100%に達していなければ防除は不要である。

B. とうもろこし

アワノメイガ 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 北斗市の予察ほにおけるフェロモントラップによる誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。
- (2) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 発生には地域差があるので、当該地域における近年の発生状況を考慮して防除要否を判断する。
- (2) 防除ガイドに準拠し、標準的な露地栽培では雄穂抽出の前後に2回、7～10日間隔で茎葉散布を実施する。

C. 豆類

べと病（大豆） 発生期：既発（やや遅） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) べと病は多雨や多湿時、密植や過繁茂で風通しが悪いときに多発する。
- (2) 予察ほ（長沼町）の「トヨムスメ」における初発期は7月11日（平年：7月8日）と平年よりやや遅く、発生量は平年より少なく推移している。
- (3) 大豆の生育は平年よりやや遅い。
- (4) 8月の降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 黒大豆および抵抗性が“弱”の黄大豆、青大豆品種では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。それ以外の品種では防除の必要はない。
- (2) 要防除水準は、開花始めの上位葉の病斑面積率で2.5%（1小葉当たりの病斑個数約30個）である。

菌核病 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 菌核病は花卉感染が主体であり、開花期の日照が少なく多湿な場合に多発する。また、茎葉によって地表面がうっぺいされるほど子のう盤の形成が良好となる。
- (2) 予察ほ（芽室町）の菜豆「大正金時」における初発期は7月22日（平年：7月26日）と平年よりやや早かった。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 豆類の生育は平年よりやや遅れている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 開花時期に注意し、薬剤散布にあたっては、大豆では開花始めから10～15日後、小豆では7～10日後、菜豆では5～7日後に1回目の散布を行い、その後必要に応じて、10日間隔で計2～3回散布する。

灰色かび病（小豆・菜豆） 発生期：並 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 灰色かび病は開花期以降の天候が低温で多湿な場合に多発する。また、過繁茂状態は本病の進展を助長する。
- (2) 長沼町の予察ほの小豆「しゅまり」では初発は認められていない（初発年：8月4日）。芽室町の予察ほの菜豆「大正金時」の初発期は7月20日（年：7月21日）と年並であった。
- (3) 8月の気温は年並で、降水量は年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は小豆、菜豆ともに年並で、発生量は年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布時期、散布間隔、散布回数は菌核病に準ずる。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、ローテーション散布を行う。
- (3) チオファネートメチル剤、フルアジナム剤およびジカルボキシミド系剤に対する耐性菌が認められているので、防除ガイドに準拠して適切な薬剤防除を実施する。

茎疫病（大豆・小豆） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 茎疫病は土壌が湿潤な条件で発生し、比較的気温が高い場合に多発する。なお、7月中旬以前に発病すると被害が大きくなる。
- (2) 本年は6月に全道的な多雨があり、一部で湛水したほ場も認められている。
- (3) 8月の気温は年並で、降水量は年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 転換畑や排水性の不良なほ場では排水対策を講じる。
- (2) 発病前から予防的に薬剤散布する。発病後に薬剤散布しても効果がないので、気象情報により大雨が予想された場合はその前に散布する。

マメシンクイガ(大豆) 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 昨年の発生量は年並であった。地域やほ場による差はあるものの、越冬密度は年並と推測される。
- (2) 予察ほにおけるフェロモントラップによる初誘殺日は、長沼町（年：7月25日）、比布町（年：7月15日）、北斗市（年：8月8日）、芽室町（年：7月26日）、訓子府町（年：8月5日）のいずれの地点も認められていない。
- (3) 8月の気温は年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は年並で、発生量は年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆の莢の生育およびフェロモントラップによる成虫初発を観察し、薬剤の散布開始時期を決めると効果的に防除できる。大豆の莢の長さが2cmに達し、加えて成虫の発生が確認されてから6日後をめどに合成ピレスロイド系剤を散布する。さらにその10日後に有機リン系剤を散布する。

アズキノメイガ（小豆・菜豆） 発生期：既発（やや遅） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける前年の被害は年並だったことから、越冬密度も年並と推測される。
- (2) 予察灯による初誘殺日は、長沼町で7月13日（年：7月10日）と年よりやや遅かった。芽室町（年：7月15日）および訓子府町（年値なし）では誘殺が認められていない。誘殺数は、長沼町では年並であった。
- (3) 8月の気温は年並で、降水量は年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を実施する。

食葉性鱗翅目幼虫（大豆・小豆）	発生量：少
------------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける食葉性鱗翅目幼虫による被害程度は、長沼町の大豆では平年並で、小豆では平年より低い。訓子府町では大豆、小豆ともに低い。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆では開花期から莢伸長期に葉を被害されると最も収量に影響する。この時期の被害葉面積率が20%に達すると約5%の減収となる。
- (2) 大豆では、要防除水準（幼虫の密度が開花期頃に大豆1個体当たり2頭、莢伸長期以降に3頭）を超える場合には、防除ガイドに準拠して薬剤散布する。

D. ばれいしょ

疫病	発生期：既発（早）	発生量：多
-----------	------------------	--------------

＜6月20日付け注意報第1号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 疫病は18～20℃が最適温度とされており、曇雨天が続くとまん延する。
- (2) 予察ほの「とうや」における初発期は、長沼町では7月7日（平年：7月16日）、北斗市では6月29日（平年：7月9日）と平年より早く、芽室町では7月10日（平年：7月9日）と平年並であった。訓子府町では7月25日（平年：7月13日）と平年より遅かった。
- (3) 予察ほの「とうや」における発生量は、長沼町および北斗市では平年より多く、芽室町では平年より少なく推移している。
- (4) 7月3半旬の巡回調査では、空知、後志、胆振、渡島、檜山、十勝および根室地方で発生が確認されており、このうち1地点では発病株率が22%と高かった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を継続する。
- (2) 本病の発生ほでは、収穫期の気温が低めに推移すると、疫病菌による塊茎腐敗が発生しやすいので注意する。
- (3) メタラキシル剤には全道で広く耐性菌が認められているので、薬剤の選択には注意する。

アブラムシ類	発生量：少
---------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおけるジャガイモヒゲナガアブラムシの発生量は、訓子府町で平年並、長沼町および芽室町では平年よりやや少ない。
- (2) モモアカアブラムシの発生量は、長沼町で平年並であった。芽室町および訓子府町では発生が認められていない。
- (3) ワタアブラムシの発生量は、長沼町で平年より少なかった。芽室町および訓子府町では発生が認められていない。
- (4) 7月3半旬の巡回調査によると、20複葉あたりの寄生虫数は最大でも5頭、多くの地点で0頭だった。
- (5) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を実施する。
- (2) アブラムシの種類によって薬剤の効果が異なるので注意する。
- (3) ワタアブラムシは下位葉に好んで寄生するので、薬液が十分にかかるよう散布する。

E. てんさい

褐斑病	発生期：既発（並）	発生量：やや多
-----	-----------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 褐斑病は高温多雨条件で多発する。
- (2) 予察ほにおける「あまいぶき」の初発期は、芽室町で7月2日（平年：7月15日）と平年より早く、長沼町では7月12日（平年：7月13日）と平年並であった。訓子府町の「リッカ」では7月23日（平年：7月10日）と平年より遅かった。初発後の発病は長沼町では平年より少なく推移しているが、芽室町では平年より多く推移している。
- (3) 7月3半旬の巡回調査では、胆振、オホーツクおよび十勝地方で発生が認められている。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の残効期間や天候などを考慮し、散布間隔が開きすぎないように注意しながら防除を継続する。特に、本病に特に罹病しやすい品種が栽培されている地域では本病の発生推移に注意する。
- (2) DM I 剤低感受性菌が道内で確認されているため、作用機作の異なる薬剤を組み合わせた体系防除を実施する。
- (3) Q o I 剤耐性菌の発生が広範囲に確認されているため、褐斑病に対する防除薬剤としてQ o I 剤（アゾキシストロビン、クレソキシムメチル、トリフロキシストロビン）は使用しない。
なお、根腐病および葉腐病に対するQ o I 剤の使用回数は、登録の範囲内とする。

ヨトウガ(第2回)	発生期：並	発生量：やや少
-----------	-------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのてんさいにおける第1回幼虫による被害は、長沼町、芽室町、訓子府町のいずれの地点も平年よりやや少ない。
- (2) 7月3半旬の巡回調査によると、被害株率が50%に達した地点は認められなかった。
- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、第2回幼虫の発生期は平年並、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 被害株率が50%に達したときを防除時期の目安とする。薬剤散布以降も被害が進展するときは追加防除を検討する。幼虫に対する薬剤の効果は令期が進むにつれて低下するので、散布適期を逸さないよう注意する。
- (2) 産卵期にベンゾイル尿素系薬剤を使用することにより、高い防除効果が得られる。第2回幼虫を対象とする場合の散布時期は7月下旬頃から8月中旬頃である。

F. たまねぎ

ネギアザミウマ	発生量：やや少
---------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察ほにおける発生量は、長沼町および訓子府町で平年よりやや少なかった。
- (3) 7月3半旬の巡回調査によると、寄生株率が50%を越える地点は認められなかった。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量はやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 道内の広い範囲で合成ピレスロイド剤抵抗性個体群が確認されているため、本系統剤の使用を避ける。

各地でネギハモグリバエが発生しています

7月下旬現在、空知、石狩および上川地方のたまねぎほ場でネギハモグリバエの被害が確認されており、一部地域では多発ほ場もみられています。第1回成虫の食痕は6月上旬以降に、第2回成虫の食痕は7月上旬頃から認められています（図1折れ線グラフ）。幼虫の被害は成虫の発生に続いて発生します。

過去3年に渡って、たまねぎの商品価値を損ねるりん茎の被害が認められています。この被害は、7月以降に葉を加害した幼虫がりん片に食入することによって生ずるものと考えられています。りん片への食入時期など、加害の詳細は明らかにされていませんが、今後も注意が必要と考えられます。

本種に対する防除は、幼虫被害が進んでからは効果が得られにくいため、成虫の発生が認められた時点で早めに薬剤散布を実施します。ネギハモグリバエの成虫食痕は、縦に並んだ白い点状の食痕が特徴的です。ほ場をよく観察して早期発見に努めましょう。

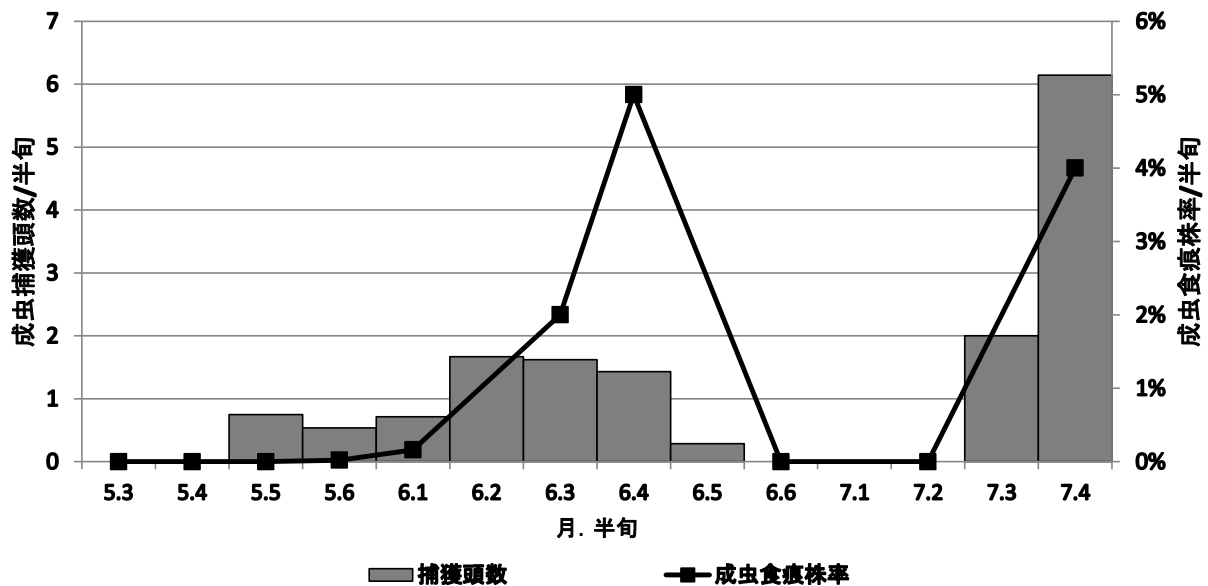


図1 多発ほ場における、粘着トラップ捕獲頭数と成虫食痕株率（平成28年）

※幼虫食痕、成虫食痕、たまねぎりん茎への幼虫被害の写真を、北海道病害虫防除所ホームページの「発生にかんがみ注意すべき病害虫」に掲載しています。

G. あぶらな科野菜

軟腐病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は、高温多雨条件で発生が多くなる。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 多窒素栽培を避ける。
- (2) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (3) だいこんでは、播種 25～30 日後に 1 回目の薬剤散布を実施する。
- (4) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。また、オキシリニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。

モンシロチョウ 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのキャベツにおける幼虫数は北斗市で平年より多く、長沼町では平年よりやや多かった。
- (2) 8月の気温は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛来および産卵の多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

コナガ 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町、北斗市、芽室町、訓子府町のいずれの地点も平年より少なかった。
- (2) 予察ほのキャベツにおける幼虫の発生量は、北斗市では平年並、長沼町では平年より少なく推移している。
- (3) 7月3半旬の巡回調査によると、食害程度は石狩、上川、十勝地方で 20 を超える地点が認められ、6月6半旬から増加傾向にある地点が散見される。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤抵抗性の発達した害虫であり、近年道内においてもジアミド系薬剤に対する抵抗性遺伝子の保持個体が確認されている。そのため、防除を行う際は以下の点に留意する。
 - ① 同一系統薬剤の連用は避ける。
 - ② 防除を実施した後、効果の確認に努め、防除効果が低いと判断された場合は、他系統薬剤による追加防除の実施を検討する。
 - ③ 所定の希釈倍数、処理量を遵守する。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除に努める。

ヨトウガ(第2回) 発生期：並 発生量：やや少

てんさいのヨトウガの項を参照。

H. りんご

黒星病	発生期：既発（早）	発生量：多
------------	------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は平均気温 15～20℃で降雨が多い場合に多発する。
- (2) 予察園での発生は、長沼町（無防除）の「昂林」では平年より多く推移している。余市町（慣行防除あり）の「つがる」では7月4半旬にわずかであるが発生が認められた。
- (3) 7月3半旬の巡回調査では発生は認められていない。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、薬剤散布を継続する。特に葉に発病が認められている場合は、果実への感染を防ぐため、十分量の薬液を丁寧に散布する。

斑点落葉病	発生量：並
--------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は夏期の高湿多湿条件で多発しやすい。
- (2) 予察園での感受性品種「王林」における発生は、長沼町（無防除）では平年より少なく推移している。余市町C（慣行防除あり）では発生が認められていない。
- (3) 7月3半旬の巡回調査では渡島および留萌地方で発生が認められている。
- (4) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、黒星病との効率的な防除で対応し、薬剤散布を継続する。
- (2) デリシャス系等の感受性品種を栽培している場合には発生に注意し、適切な防除を行う。

ハマキムシ類	発生量：やや少
---------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 長沼町（無防除）、余市町（慣行防除あり）の予察園のフェロモントラップによる誘殺数は、リンゴコカクモンハマキ、リンゴモンハマキともに平年よりやや少ない。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

モモシンクイガ	発生量：並
----------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般園における前年の発生量は平年よりやや多かったことから、越冬密度は平年よりやや高いと推測される。
- (2) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、余市町（慣行防除あり）では平年並、長沼町（無防除）では平年よりも少なく推移している。
- (3) りんご果実の生育が早かった影響で、産卵開始期は早く、長沼町の予察園における産卵数および被害果率は平年並であった。
- (4) 8月の気温は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

ハダニ類	発生量：少
-------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ハダニ類は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 長沼町（無防除）および余市町の予察園（慣行防除あり）におけるハダニ類の発生量は、平年より少なく推移している。

- (3) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 高温乾燥条件が続くときには発生状況に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。
- (2) 同一系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性の発達が急速に進むので、防除ガイドに準拠して適正な防除を行う。

キンモンホソガ 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町（無防除）で平年よりやや少なく、余市町（慣行防除あり）では平年より少ない。被害はいずれの地点も平年並に推移している。
- (2) 8月の気温は平年並で、降水量は平年よりやや多いと予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

付記

北海道地方 3か月予報 (8月から10月までの天候見通し)

平成28年7月25日
札幌管区气象台発表

<予想される向こう3か月の気候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

8月 天気は数日の周期で変わるでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率50%です。

10月 日本海側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。オホーツク海側・太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

<<気温>>

[北海道地方]

3か月	20	30	50
8月	30	30	40
9月	30	30	50
10月	20	40	40

低い

平年並

高い

<<降水量>>

[北海道地方]

3か月	20	40	40
8月	20	40	40
9月	30	30	40
10月	30	40	30

少ない

平年並

多い

6月15日～8月31日は**農薬危害防止運動**実施期間です！

北海道では、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬を使用する機会が増える6月から8月を期間として、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理等を推進する「**農薬危害防止運動**」を実施します。

北海道農政部生産振興局技術普及課
(TEL 011-231-4111 (内線)27-838)
北海道病害虫防除所
(TEL 0123-89-2080)
各総合振興局・振興局農務課



北海道
平成28年6月15日～8月31日

■ 農薬使用に関する注意事項

- 農薬は、農薬取締法に定められた事項が表示されたもの、または特定農薬に該当するものを選び、有効期限内に使い切れる量を購入する。
- 農薬のラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を読んで、十分理解し、表示された濃度や使用量等を守り、必要量以上に農薬を調製しない。
- 散布作業前日は、飲酒を控え、十分な睡眠をとる。体調が優れないときや著しく疲労しているときは、散布作業に従事しない。
- 農薬の使用前には、防除器具等を点検し、十分に洗浄がなされているか確認する。また、農薬の使用後には、防除器具の薬液タンク、ホース、噴頭、ノズル等農薬残留の可能性がある箇所に注意して、洗浄を十分に行う。
- 農薬を散布するときは、必要に応じ、あらかじめ周辺住民等に周知するとともに、看板等を立てるなど現場に近づかないよう配慮する。
特に無人ヘリで防除する場合は、学校や病院等の公共施設及び近隣の住民等に対し、実施予定日時、区域、薬剤等についての事前周知に努める。
- 農薬の飛散による危被害を防止するため、近隣の住民、飼育されている家畜及び蜜蜂、河川等の周辺環境への影響に注意する。
特に無人ヘリで薬剤散布する場合は、有機農産物が生産されているほ場等に農薬が飛散しないよう注意する。
- 農薬の調製及び散布作業中は、マスク、手袋、眼鏡等を着用し、体を防護する。
- 散布作業後は、よくうがいをし、手や顔などの露出部だけでなく入浴し全身を十分洗う。

★ 農薬情報の掲載サイト

農薬の登録情報や農薬取締法等については、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」(<http://www.maff.go.jp/nouyaku/>)をご覧ください。